

日本語母語話者の中国語の「量詞」の習得に関する一考察

Consideration of Chinese Numerical Classifier Acquisition
by Native Speakers of Japanese

藺 梅*

Mei Lin

本稿は、日本語を母語とする初級レベルの中国語学習者の「量詞」の習得について考察するものである。現代中国語の「量詞」は使う範囲が広く、表現機能も豊富なため、外国人学習者にとって大変習得しにくいのが問題である。本稿では、初級レベルの範囲で、習得状況の調査を行った後、「量詞」の文法的な振る舞いの難しさを取り上げ、現在の日本の教科書における「量詞」の扱いについて問題点を指摘する。

キーワード：量詞 助数詞 教科書 負の転移

I. はじめに

外国人にとって中国語の「量詞」の習得はしがたい問題である。「量詞」は中国語の中で最も特殊な品詞であり、数が多いことのみならず、分類も多岐にわたり、語用的な振る舞いもとても複雑である。

日本語には数をはかる単位、即ち「助数詞」があるため、欧米の中国語学習者と比べ、日本語を母語とする日本人学習者のほうが「量詞」を習得するには有利だと思われる。しかし、中国語の「量詞」は助数詞とは非常に複雑に絡んでいて、却って習得しがたいのが現実である。

本稿では、まず初級レベル¹⁾の日本人学習者の中国語の「量詞」に関する習得状況を取り上げ、その結果を分析する。次に初級レベルでは日本語の「助数詞」と比べて中国語の「量詞」の特徴を明確にしたうえで、現在日本で使用される教材の中の「量詞」についての取り上げ方を考察し、その適切性を考えていきたい。

II. 先行研究

樋口(2007)²⁾は日本人学習者(中級レベル以上)に事物が単数である時の数量フレーズの付加に関する誤用実態の調査を行った。またその結果に基づき、「中国語では一般的に単数時にも数量表現がなされ、日本語では単数であることを取り立て述べる必要のない限り、一般的に単数に

は数量表現がなされない。中国語は単数有標、日本語は複数有標である。」と指摘されている。

王順洪（2008）³⁾ は日本語母語話者の中国語の「量詞」の習得について、日本語にも助数詞があることは日本人学習者にとって有利な一面であると同時に、日本語の助数詞の 110 個⁴⁾ に対して中国語の量詞は 600 個あり、名詞を修飾するカテゴリーが詳細であることを指摘され、また「量詞」の誤用について同形同義の言葉でもそれぞれ品詞の違いによって使い方が違ってくことと使用範囲の違いが原因だと指摘されているが、教科書の取り上げ方は学習者の習得にどのような影響を与えるかについての分析が見られていない。

以上の先行研究から分かったのは、中国語と日本語において共通なところが対象物のどのカテゴリーに属するかを分別するという類別詞（中国語では「量詞」と呼び、日本語では「助数詞と呼ぶ）があるが、両言語におけるその言葉の数に開きがあり、数量表現に関する統語的ルールは明らかに異なることである。

二つの先行研究では、日本の大学における量詞に関する教育方法を論じなかった。実際には、日本のほとんどの大学では初年次に中国語を履修する外国語の一つとされている。では、大学で一年間中国語を学習して「量詞」の習得状況はどうだろうか？

Ⅲ. 学習者の習得についての実態調査

1. 調査目的：

日本「中国語教育学会」の学力基準プロジェクト委員会によって作成された『中国語初級段階学習指導ガイドライン』⁵⁾ には、習得する量詞の数は名量詞と動量詞を合わせて 48 個ある。実際には一年間の学習する数が半数にも及ばない。それでも教育現場での習得する状況は決して芳しくない。その状況をデータで示すために、次の実験調査を行った。

2. 被験者：

学習歴一年の初級レベルの受講生を対象とする

A クラス 25 名、B クラス 23 名、計 48 名。

3. 調査内容：

日本で出版された教科書（実際にその教科書を使用して一年間講義した）の取り上げ通りの習得すべきな「量詞」を範囲とした。調査の目的は「数+量詞+名詞」（以下“数量フレーズ”とする）の習得状況の実態と、さらに“数量フレーズ”を使ってどの程度の作文ができるかの実態を把握することで、以下の二つの形式の出題にした。

表 1. 「数量フレーズ」空欄埋め：

提示した問題	日本語	求めた回答
① 三 () 杂志	(3 冊の雑誌)	本
② 两 () 鞋	(2 足の靴)	双
③ 一 () 汉堡包	(1 個のハンバーグ)	个
④ 五 () 学生	(5 人の学生)	个
⑤ 四 () 红茶	(4 杯の紅茶)	杯

表 2. 邦訳：

構文	提示した問題	求めた回答
主語 + 動詞 + 数量フレーズ + 名詞	① 彼は日中辞典を二冊持っている。	他有两本日中词典
主語 + 動詞 + 了 + 数量フレーズ + 名詞	② 私はパソコンを一台買いました。	我买了一台电脑
主語 + 動詞 + 了 + 数量フレーズ + 名詞	③ 彼女はテレビを二時間見ました。	她看了两个小时电视

4. 調査結果の分析

a. 「穴埋め」の回答結果は図 1 に示したように、A クラスの正解の多い順は⑤24、③24、①23、②17、④13、B クラスの正解の多い順は⑤23、③22、①20、②15、④10 になっている。二クラスの正解状況は矛盾にはならないが、予想の結果⁶⁾と反した。⑤の“杯”は日本語と同じで「正の転移」になり、③の“个”は書き方が違うが日本語の“個”として習得したようだ。興味深いことは④の“个”が全く日本語のつながりのない②の“双”より正解率の低さである。“个”という「量詞」を覚えるのは難しくないが、問題は名詞との配列のことである。④の「量詞」のあとに

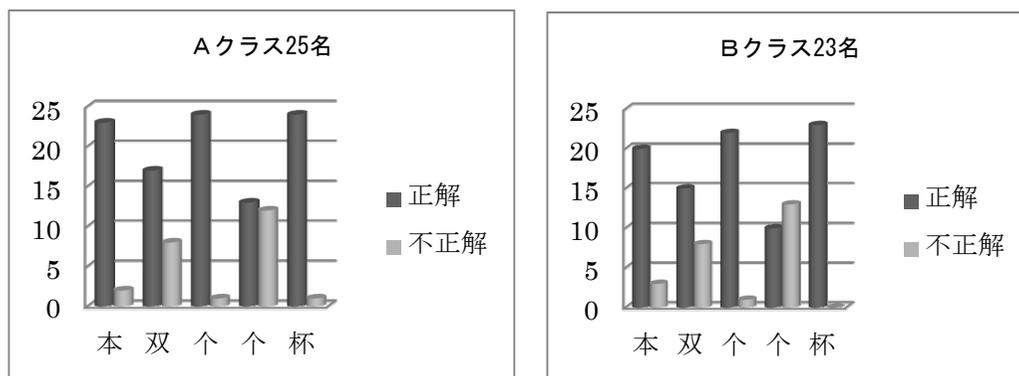


図 1. A・B クラス量詞の回答調査結果

くるのが“学生”でいわば人間であるため、母語の日本語では“個”が人間を数える助数詞ではないため正解できず、しかも“個”の代わりに“人”を答える誤答が目立った。こうした結果からみて、やはり母語からの「干渉」が考えられる。

b. 「邦訳」の回答結果は図2のとおりである。AクラスとBクラスの正解の多い順で並べると同じ①、②、③になるが、表2に上げたように文2と文3は同じ構文の問題である。なぜ文3だけ不正解率が極端に高いのかを確認すると、文3の「数量フレーズ」の「量詞」は時量フレーズ⁷⁾なのである。即ち、最もレギュラーの構文である「主語+動詞+数量フレーズ+名詞」のほうが一番習得しやすく、過去形が入った構文になると、名量詞フレーズが時量詞フレーズより習得できた人数が多いことが分かった。

今回の2パターンの習得状況について行った調査の結果からみて、やはり回答のエラー（不正解）を起こした大きな要因は「負の転移」によるものが認められるだろう。水野（2001）⁸⁾「学習者が自分の意図を伝えるのに必要な目標言語の知識が十分でなくコミュニケーションが困難な場合、その不足を補うためにL1（母語）に依存することがある。とりわけ学習プロセス初期の段階では、目標言語の知識が少ないので、困難を克服できずL1に依存しがちである。」

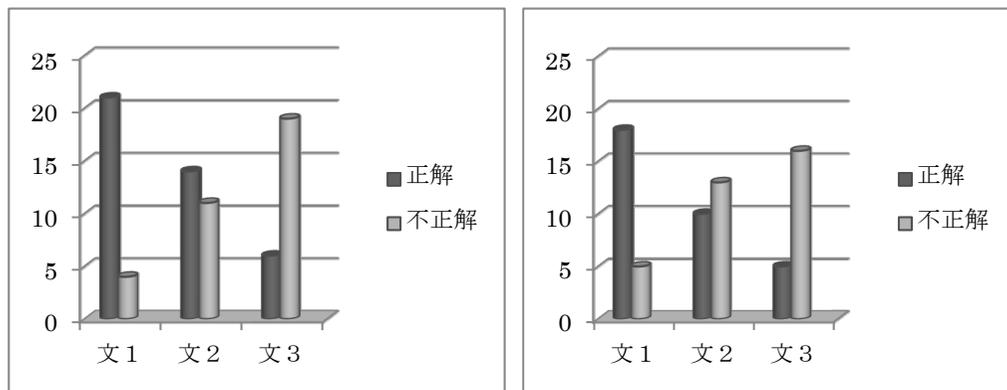


図2. A・Bクラス作文の回答調査結果

IV. 中国語の「量詞」

中国語の「量詞」は日本語の助数詞と同様な働きを持っているのかについて、樋口（2007）⁹⁾では、「量詞」と助数詞は両者共、対象物がどのカテゴリーに属するかを切り分け分別するので、類別詞とも呼ばれる。日本語の「助数詞」はこの機能に専一とする。だが、「量詞」は事物の類別機能に留まらないその他の機能もある。」と述べたように、日本語の助数詞と比べて中国語の「量詞」は、語法的に複雑で表現機能もバラエティーに富む特殊な品詞である。ここで初級レベルでは習得すべきな「量詞」の特徴をまとめておく。

1. 名詞との組み合わせの切り分け分別するのが細かい

中国語と日本語の類別詞として同じ「匹」を例にしてみよう。日本語ではほとんどの動物が「匹」で数えられる¹⁰⁾。例えば、一匹の馬、一匹の猫、一匹の魚という数え方があるが、これらの表現を中国語に訳すと「一匹马」、「一只猫」、「一条鱼」となる。従って、杉村(1994)¹¹⁾は「中国語においてどの名詞に対しどの専用名詞を使うかは日本語からの類推がほとんどききません」と述べている。表3でごく一例をあげると一目瞭然となる。

表3. 「量詞」と「助数詞」の配列の一例

中国語の助数詞	名詞(中国語⇄日本語)	日本語の量詞
头	象, 狮子 ⇄ 象, ライオン	頭
双	鞋, 袜子 ⇄ 靴, 靴下	足
本	辞典, 杂志 ⇄ 辞書, 雑誌	冊
只	猫, 兔 ⇄ 猫, ウサギ	匹

2. 指示代名詞が名詞を修飾する場合

日本語の「コソアド」系の指示語は名詞の前にある場合は「この、その、あの、どの」を使うことに対して中国語では「这、那、哪」だけでなく、それぞれの名詞に相当する「量詞」が必要となり、「指示代詞+量詞+名詞」の構文となる。例えば、“この本”、“その写真”、“あのレストラン”の日本語を中国語にしてみれば「这一本书」、「那一张照片」、「那一家餐厅」になり、一般的に“一”が省略されるため、「这本书」、「那张照片」、「那家餐厅」になる。

- ① この辞書はとても高いでしょう。 ○ 这本词典很贵吧。 × 这词典很贵吧。
 ② この指輪はどうですか? ○ 这个戒指怎么样? × 这戒指怎么样?

また、指示語と「量詞」だけで目的語になることができる。

- ③ 私はこれを買います。 ○ 我买这个。 × 我买这。

3. 重ね型の使い方

「量詞」の重ね型の使い方も現代中国語の一つの特徴である。このような表現は数を数える働きが弱く、表意上では次のようである。

- a. 「量量」型：“どれもこれも、例外なしに”の意味を表す¹²⁾
 ④ 本本画报都很有意思。 / どの画報もみなおもしろい。
 ⑤ 他家顿顿吃米饭。 / 彼の家では三度三度お米のご飯を食べる。
 b. 「一量量」型：個々別々の形でたくさん存在している様子を描写する。
 ⑥ 桌子上摆着一盘盘的水果。 / テーブルに果物が一皿一皿並べてある。

⑦ 一次次的失败，并没有吓倒他。／度重なる失敗によっても、彼はおじけづいたりはしなかった。

4. 数詞と「量詞」の間に形容詞が入ることができる

量詞は具体的な物に限らず、意識や心情のような概念的なものに対しても用いることができる。この場合、（数詞は“一”“几”に限られる）本来の数を計る単位としての機能は弱まり、被修飾語を形容する働きが強まる。例えば、“一大群人”（大勢の人），“一小杯酒”（盃一杯）など。

⑧ 公司损失了一大批军火和人力，你们说说应该如何处理啊！／会社も武器と人材をずいぶん失った。どうすればいいか、言ってみろ。（『中国語ジャーナル』2011.4）

⑨ 少爷，弹了一整晚也该歇着了。／坊ちゃん、一晩中弾いているなんて、いい加減お休みにならないと。（『中国語ジャーナル』2011.4）

5. 時量補語・動量補語¹³⁾

「時量補語」は動詞の後に置き、動作或いは動作の状態がどれくらい持続しているかを表す。その中にさらに次のように分ける。

a. 持続性のある動詞の後に使うときは、その動作がどれくらいの時間を持続しているかを表す。

⑩ 她睡了三天了，还没清醒。／彼女はもう三日間寝ていたが、まだ目覚めていない。

⑪ 会议开了两个多小时了，还没结束。／会議は二時間以上続いたが、まだ終わっていない。

b. 持続性の意味を持たない動詞の後に使う場合は、その動作を行ってどれくらいの時間を経ているかを表す。

⑫ 哥哥结婚已经十年了。／兄は結婚して既に十年経っている。

⑬ 我来北京才四个月。／私は北京に来てまだ四ヶ月しかない。

「動量補語」は動詞、形容詞の後に置き、動作の回数について補って説明するものである。

⑭ 我们去了三趟了，都没见到老王。／私たちは三回行ったが、いずれも王さんに会えなかった。

⑮ 他又被老师批评了一顿。／彼はまた先生に叱られた。

目的語がある場合は、「名詞目的語」と「代詞目的語」があり、構文的な違いは次のようである。

a. “名詞目的語”の構文：主語＋動詞＋「動量補語」＋“名詞目的語”

⑯ 我去过三次上海。／私は上海に三回行ったことがある。

b. “代詞目的語”の構文：主語＋動詞＋“代詞目的語”＋「動量補語」

⑰ 我们帮了他两次。／私たちは彼を二回手伝った。

V. 教科書の取り上げについて

教室での第二言語の習得には最も欠かせないものが当然教科書である。その指導書の導くこと

により、学習者の習得に対しての影響も無視できない大きいものである。では、現在日本で出版された大学生用の教材はどのように「量詞」を取り上げているのだろうか？本稿は初級レベル用の教科書 20 冊を対象にして考察することにする。

表 4. 初級中国語教科書の「量詞」の取り上げ一覧

教科書	第()課	個数	指示代名詞 +量詞	文法 (有○・無×)	練習問題 (有○・無×)
中国語はじめの一步	第(4)課	5	○	○	○
中国語ポイント 55	第(5)課	5	○	○	○
一冊めの中国語(会話)	第(5)課	9	○	○	○
一冊めの中国語(購読)	第(5)課	7	○	○	○
はじめまして!中国語	第(7)課	8	○	○	○
はじめての中国語教室	第(2)課	14	○	○	○
ともだち・朋友	第(6)課	9	×	○	○
中国語キャンパス基礎編	第(8)課	12	×	○	○
おぼえる中国語	第(3)課	9	○	○	○
はなまる中国語	第(5)課	4	×	○	○
楽しく学ぼうやさしい中国語	第(6)課	8	×	○	○
中国語入門アタック	第(10)課	4	×	○	○
快活中国語 I	第(3)課	8	○	○	○
システムティック中国語	第(5)課	10	×	○	○
話し放題中国語	第(4)課	6	○	○	○
話したくなる中国語 (朝日出版社)	第(4)課	4	○	○	○
ゼロから学ぶ中国語(同学社)	第(5)課	10	×	○	○
ポイントマスター・初級中国語 (同学社) 常用量詞附録	第(11)課	7	×	○	○
極める中国語(同学社)	第(4)課	11	×	×	○
どんどん吸収中国語(光生館)	第(3)課	9	×	○	○

注：2008 年以降出版されたものを範囲とした。

考察：

1. 取り上げた「量詞」の数が少ない

中国語の「量詞」は日常会話の中で使う頻度が非常に高いので、多くの「量詞」を覚える必要

がある。『中国語初級段階学習指導ガイドライン』の中に全部で48の「量詞」を学習する範囲とされているが、「初級中国語教科書の「量詞」の取り上げ一覧」を示したように10以上の教科書は僅か4つしかない。

では、中国で外国人向けの教科書はどうだろうか？孟国（2011）¹⁴⁾の調べによると『初級漢語課本』に46、『新実用漢語課本』に36取り上げている。「量詞」は中国語の日常会話に常に必要としている表現なため、一定数の「量詞」を習得するのは当然だろう。

2. 文法的な用語を使用する教科書が少ない

量詞は事物を数える「名量詞」と、動作の量を計る「動量詞」に大別される。数詞と量詞の組み合わせは「数量詞」と呼ばれる。現在中国では外国人に対する教科書では、中国語の「量詞」は“名量詞”、“動量詞”、“数量詞”に分け、構文上ではそれにより違う。しかし、調べた教科書では“名量詞”を量詞と言い、ほかの動量詞や数量詞を取り上げられず、“動作の回数の表し方”や“動作の時間の長さの表し方”などの文法の公式としてしか示されていない。

3. 「量詞」のための語感トレーニングの練習問題が少ない

教室第二言語習得（classroom second language acquisition）¹⁵⁾は、その言語の構文を理解するのが困難ではないが、使いこなせることには一定のトレーニング、即ちアウトプットが重要視されるべきではないかと考えている。“初級中国語教科書の「量詞」の取り上げ一覧”の中では、「量詞」のための練習問題が少なく、しかもその後の内容に出た量詞に対しての説明は見当たらない。従って、調べたほとんどの教科書「量詞」についての取り上げ方に問題点があると言わざるをえない。

量詞は数を計る単位として考えても、メートルやグラムなどの度量衡もその一部だが、量詞の特徴は形態形状の区別や容器なども単位としてしているところにある。日本語の助数詞も発達しているので日本人にとっては飲み込みやすい概念だが、魚を“条”で数えるなど、日本語のそれとは形状の捉え方が違うものも少なくなく、的確な運用には中国語的な量詞感覚を養う必要がある。

VI. まとめ：

現在、日本では日本語の助数詞の使用が衰退している傾向があると専門家が言う。三保忠夫（2006）¹⁶⁾「確かに、助数詞を細かく使う人や場面・機会などは減少しつつあるように見える。古代、あるいは近世・近代に較べると多様性を欠き、単純化しつつあるようである。」

学習者は第二言語を習得する際に、当然のことながら第一言語である母語の影響を受けるのである。いわゆる言語の「転移」という現象が起こる。日本語に助数詞があることは、中国語の「量詞」についての習得に助けになると思われるが、日本語の助数詞は対象物がどのカテゴリーに属

するかを切り分け分別するという機能にとどまることに対して、中国語の「量詞」の語法的な複雑さと表現機能の豊富なことからみて、両者は同じ次元で語れるものではないと言っても過言ではないだろう。

現代の日本では日本語の中の助数詞の使用が衰退する傾向にあり、特に若い人が物の性質や形に関係なく、“一つ”や“一個”で数えることが多く見受けられる。もし中国語教育の現場では、重要な役割を担っている「量詞」についての指導を系統的に行えなければ、学習者は日本語の助数詞として認識し、軽く受け止めてしまう。しかし、後に「量詞」の複雑な振る舞いに直面するとき、非常に困惑してしまうのではないかと考えられる。教師の指導法が問われる前に、教科書の取り上げ方に関してもっと重要視すべきではないかと思う。

参考文献、注

- 1) 本稿では学習歴が一年間のことを初級レベルとする
- 2) 樋口幸子：『中国語教育』第5号「単数時の数量詞付加に関する誤用調査—日本人学習者への教学上における考察」
- 3) 王順洪：『日本人漢語学習研究』（北京大学出版社, 2008.1）pp151-156
- 4) 先行研究の内容に出された数字であるが、定かではない可能性もある
- 5) 中国語教育学会：「中国語初級段階学習指導ガイドライン」2007.3
- 6) 予想の結果は日本語の助数詞にない②の“双”が最も不正解率が高いとしている
- 7) 時量フレーズの“時量”は数字+時間帯の言い方からなっている。例えば、一个小时（一時間）
- 8) 水野光晴：『外国語習得その学び方 100 の質問』（研究社, 2001.3）p67
- 9) 樋口幸子：『中国語教育』第5号 p60
- 10) 松村明編：『大辞林』三省堂, 2006
- 11) 杉村博文：『中国語文法教室』大修館, 1994.4
- 12) 相原茂・石田知子・戸沼市子：『Why?にこたえるはじめての中国語文法書』（同学社, 2009.4）p101
- 13) 陸俊明主編：『現代汉语语法答问』〈下〉北京大学出版社, pp68-74
- 14) 孟国：『对外汉语十个语法难点的偏误分析』北京大学出版社, p261
- 15) 小池生夫編集主幹：『第二言語研究の現在』（大修館書店, 2009.1）pp103-104
- 16) 三保忠夫：『数え方の日本史』（2006.4）p 190